

報 告

## 東日本大震災被災地（岩手県山田町） 学生ボランティア活動の引率に参加して

脇 野 幸 太 郎

（長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科）

A Record of a Volunteer Activity of the students in the area hit by  
the east Japan great earthquake (Yamada town, Iwate Prefecture)

Kotaro WAKINO

(Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,  
Nagasaki International University)

### はじめに

あの未曾有の大災害から7か月を経た2011年10月、本学メンバーによる被災地ボランティア活動を実施した。参加したのは、名乗りをあげてくれた学生8名引率の教職員2名の合計10名である。本学としては初の試みであった（先に、教職員4名からなる現地視察のための先遣隊が派遣されてはいたが）。

本学は、このような活動を今後も継続的に実施していきたいという強い希望を有している（事実、本年（2012年）8月から9月にかけても、3回にわたり山田町への学生や教職員の派遣が行われている）。そのためにも、最初の活動の経緯や現地での経験などを記録しておくことには一定の意義があるものと考え、本稿を書き記すこととした次第である。

### 1 ボランティア活動の状況

#### ① 活動の概要

派遣は、2011年10月14日(金)から17日(月)にかけての3泊4日の日程で行われた。ただし、のちにも記すように、遠方である現地への移動に時間を要したため、実際に現地での活動を行えた

のは2日間（実質1日分）であった。

派遣先は、岩手県下閉伊郡山田町の山田町災害ボランティアセンター（山田町社会福祉協議会が設置・運営）である。ここを拠点に、同センター職員の指示のもと、主として個人宅のがれき撤去の作業を行った。

参加メンバーは、本学国際観光学科および社会福祉学科の2～4年生8名（男子5名、女子3名。留学生男女各1名を含む）、ならびに引率者として筆者およびキャリアセンター職員<sup>1)</sup>が参加した。参加学生は、本学ボランティアセンターの呼びかけに応じて集まってくれたもので、全員が最後まで大変熱心に活動にかかわってくれた。

#### ② 実施の経緯（その1）なぜ岩手県山田町を派遣先としたか

岩手県山田町は、リアス式海岸で知られる三陸海岸のほぼ中央に位置する、人口約17,000人の風光明媚な町である。ただ、その立地関係から、古来より幾度にもわたって津波の被害を受けてきた歴史がある。今回の震災においても、主として津波により町域全体が甚大な被害を受

けている。

現在（本稿執筆時の2012年10月現在）、同町は復興に向けた歩みを着実に進めており、町の災害対策本部も廃止されているが、筆者らが現地に入った2011年10月ころは、町役場周辺などの中心市街地も見渡す限りの更地であり、復興未だしという状況であった。

もちろんこれは山田町に限ったことではなく、岩手県沿岸部の市町村は軒並み同様の状況だったわけであるが、そのようななかで本学が山田町に学生ボランティアを派遣するに至った経緯について触れておきたい。

2012年4月に本学ボランティアセンターが設立され、学内で被災地へのボランティア派遣の機運が高まっていた折、それをどこに派遣すべきかということが問題となった。今般のボランティア派遣については、それが単なる一過性のものではなく、派遣先と本学との信頼関係を構築しつつ、継続的に実施していくべきものであることが当初より確認されていた。そこでそのような認識のもと、本学がお役に立てる派遣先を探すこととなった。

そこでまず、ボランティアセンターにおいて、被災地とかかわりのある学生がいないかを調査したところ、岩手県岩手町出身の学生が1名いることが判明した。そこで、同町に問い合わせたところ、同町は岩手県内でも内陸部に位置しており被害は比較的軽微なので、ボランティアを派遣するのであれば被害の大きな沿岸部にお願いしたいとの返答であった。そこでさらに同町に派遣先について紹介をお願いしたところ、同町からも多くのボランティアが派遣されている山田町を紹介していただいたというのが一連の経緯である。

このように、本学と山田町とのご縁は必ずしも深いものとはいえないが、今後、継続的な交流を通じて、このご縁を深めていきたいというのが本学ボランティアセンターとしての希望である。

### ③ 実施の経緯（その2）派遣までの事前準備

そこで2011年8月、まず現地の状況を把握するため、教職員4名からなる先遣隊が山田町へ派遣された。9月末には、当該メンバーによる現地状況の報告会（本学ボランティアセンター主催）が教職員・学生全員を対象として行われ、現地の被害状況は予想以上に深刻であることが報告されたのち、本学としてもぜひ学生ボランティアを派遣したいという意向がボランティアセンターより示された。そこで、報告会に出席していた学生に現地ボランティア活動への参加の意思をアンケート用紙により尋ねたところ、前述のとおり8名の学生から参加希望の申し出があり、このメンバーに引率の教職員2名を加えた10名で派遣チームを組織することとなった。その後、10月4日、12日の2回にわたり、上記メンバーにボランティアセンター運営委員会委員長・副委員長も加わって、事前学習および打ち合わせを実施した。その主な内容は、ボランティア活動を行うにあたっての心構え、旅程について、服装や荷物について、体調管理について、等である。また、現地への往復の交通については、学生の経済的負担をできるだけ軽くすることを基本方針として、ボランティアセンターから旅行社を通じて手配した。長崎から現地へ直行する適当な航空路線がないことや費用面を考慮し、移動ルートは長崎から東京（羽田）までは航空機、羽田から盛岡までは夜行ツアーバス、盛岡から山田までは路線バス（復路も同ルート）とすることが決定された。

現地災害ボランティアセンターへは、所定の様式の「ボランティア参加申込書」を出発1週間前にFAX送信し、以後は直接電話で参加人員の確認、現地天候の確認、宿泊時の夕食の弁当の手配（事前に依頼しておく、当日弁当（1食500円）を用意してもらえる）等を行った。

現地で必要となる物品のうち、寝袋（現地のボランティア宿泊施設には、寝具等の準備のないことが確認できていたため）、安全靴等かさばるものについては、本学ボランティアセンター

および学生課の配慮により、事前に現地センターへ宅配便で発送した。

派遣の日程については、学生の授業等になるべく支障が生じないようにするため、週末を軸に調整することとし、また、気候条件などを考慮して、10月14日(金)出発、17日(月)帰着とすることが決定された。以下では、出発から帰着まで実際のスケジュールに即して、現地での活動状況について報告することとしたい。

#### ④ 現地での活動状況

##### □ 1 日目 (10月14日・金) 雨

- 15:00 大学に参加メンバー10名が集合。
- 15:55 ハウステンボスより長崎空港行きバス乗車。
- 17:10 長崎空港着。チェックイン時、使用機の到着が遅れており、搭乗予定の便の羽田到着も定刻の20:55から30分程度遅れる見込みとの情報に接する。羽田空港で乗り継ぎ予定の夜行バスの出発時刻は21:30であり、現在の遅れの状況では羽田空港での乗り継ぎは困難と判断、羽田到着後は、夜行バスの他の経由地（東京駅22:30、新宿駅23:00のいずれか）へ電車で移動することとし、その旨を学生にも伝達した。
- 18:45 定刻より40分遅れで長崎空港発。
- 21:55 定刻より1時間遅れで羽田空港着。東京駅はもちろん、最後の経由地である新宿駅（23:00）でもぎりぎりの状況であるため、タクシーを利用することとし、3台に分乗。幸い首都高がすいており、22:45ころ、所要40分程度で新宿駅西口の乗り場着。
- 23:00 盛岡行き夜行バス乗車。

##### □ 2 日目 (10月15日・土) 雨のちくもり

- 6:05 盛岡駅西口着。徒歩で反対側の東口（路線バス乗り場）へ移動。東口前のコンビニエンスストアで各自朝食を購入。

この時点では土砂降り。

- 6:40 盛岡駅東口7番乗り場より宮古駅前行き岩手県北バス乗車。
- 8:50 宮古駅到着。
- 9:00 宮古駅前2番乗り場より田の浜行き岩手県北バス乗車。車中からも、甚大な被害の状況をうかがい知ることができる。
- 9:30 バス車中より、バス下車後ボランティアセンターへ移動するためのタクシーを電話にて手配（本来車内での通話はマナー違反であるが）。
- 9:50 山田中央町バス停着。手配していたタクシー3台に分乗。
- 10:00 山田町災害ボランティアセンター着。雨はほぼあがっている。気温も18度程度で比較的あたたかい。

ボランティアセンター本部へ到着のあいさつと受付（今回は初めてのメンバーは、必要事項を書類に記入の上、住所を確認できるものを提示）、活動内容の確認。現在、ボランティアへのニーズの大半は、屋外でのがれき撤去作業とのこと。午前中は雨のため活動が中止となったが、午後は天候が回復しそうなので、作業が再開できる見込みで、本学メンバーにも現場でのがれき撤去をお願いすることになる旨の説明を受ける。

受付後、本部に隣接するボランティア宿泊施設へ移動。宿泊施設は武道場を転用したもので、一面に畳が敷かれており、中央に男女の使用エリアを区切る衝立が立てられている。宿泊するボランティアの人数が多いときは1人あたり畳1畳の利用が原則となるが、本学宿泊時は、他に個人参加の方が2～3名宿泊されているのみで、広く使わせていただくことができた。

- 10:30 荷物を整理後、キャリアセンター職員と女子学生3名が昼食の買い出しへ。買い物のできるスーパーは、山田中央町バ

ス停付近（山田町の中心市街地）にあり、ボランティアセンターからは車で10分程度かかるため、タクシーを利用する（スーパーまで片道1450円程度）。なお、スーパーやコンビニエンスストアはほぼ通常の状態に復しており、現地での食料品等の購入には問題はない。

11：50 買い出しをしてきてくれたメンバーに感謝しつつ昼食。

12：50 センター本部にてボランティア活動のオリエンテーションおよび作業のマッチング。

まずセンター職員から活動にあたっての注意事項等についての説明、その後作業内容の説明。本学メンバーは全員で町中心部のお宅のがれき撤去作業を割り当てられる。

13：00 作業に必要な資材（スコップ、熊手、鎌、つるはし、一輪車、土のう袋、皮手袋、長靴・中敷き等）を借り受け、センターの送迎車で現場へ出発。15：30センター戻り予定。

13：15 現地着。作業依頼主の女性の立会い後、作業開始。作業は基本的に、熊手やスコップでがれきを掻き出し、土のう袋に詰めて道端へ搬出する手順。ガラスの破片や釘なども多いため、通常の軍手では危険で、皮手袋は必需品。皆驚くほどまじめに、黙々と作業に従事。時折、適宜休憩をとるよう引率教職員から促すほどであった（かなり重労働なので、40～50分に1度は休憩をとるよう、センターからも指示されている）。

15：15 2時間経過。作業開始前と比べてかなりきれいになり、作業はほぼ完了。再度依頼主に立ち会っていただき、感謝の言葉をいただく。迎えに来てくれたセンタースタッフからも、「みなさん作業が早いですね。今日全部終わるとは思っていませんでした」とお褒めをいただく。

15：40 センターへ戻る。資材を洗浄、返却。

その後、リーダー（筆者）がセンター本部に作業終了を報告。予定通り作業が進んだか、けが人がなかったか等の確認を受け終了。

終了後は、移動後そのまま作業に入ったこともあり、さすがに全員疲労困憊、センター近くのオートキャンプ場内にあるボランティア用シャワーを使用後仮眠。

18：30 注文しておいた弁当で夕食。その後全員でミーティング。本日の感想、反省、明日の予定の確認等。

22：00 消灯、就寝。

□3日目（10月16日・日）雨のちくもり

6：00 起床。夜中は大雨だったが、この時間には小降りになっている。天候の状況から、この時点では午前中の作業が行われるかわからないので、行われた場合と行われなかった場合の双方を想定して予定を立てる：

→ 午前中作業実施の場合：午後に荷造り・発送、宿泊所清掃等の作業後、出発。

→ 午前中作業がない場合：午前中に上記出発準備作業。午後作業があれば参加。

7：00 朝食。本日の行動予定につき全員でミーティング。

8：20 本部にてマッチング（本来8：10からであるが、筆者の勘違いにより遅れた）。午前から予定通り作業実施とのこと。本日は、昨日と異なる現場のがれき撤去・草取り作業。茨城から個人で参加の2名の男性と計12名で作業にあたるよう指示を受ける。

8：40 昨日と同様資材を借り受け、送迎車で出発。5分ほどで現場着。現地でお手洗いを貸してくださるお宅をセンタースタッフに案内してもらう（近隣の適当なお宅

にセンタースタッフが頼んでくれる)。

- 9:00 依頼主の立会い後、作業開始。今日の現場はがれきとともに腰あたりまでの雑草が繁茂している。がれきは昨日と同様土のう袋に詰めて道端に、雑草は引き抜いて野積み。昨日と同様、全員大変熱心な作業ぶり。

依頼主の方も一緒に作業に加わってくださる。大変親切な方で、メンバーのために飲み物やおやつ、タオル等を用意しておいてくださる。

- 10:50 3人の男子学生が、先ほど案内してもらったお宅へお手洗いを借りに行く。なかなか戻ってこない。あとで聞くと、高齢女性1人暮らしのお宅で、お茶まで出していただいとお話をうかがっていたとのこと。こういった経験も学生には大変勉強になると思われる。筆者も近所の年配の女性と20分ほど立ち話をし、震災当日の様子やその後の生活などについてお話をうかがう。昨日の現場もそうであったが、住民の方はどなたもボランティアメンバーに対し大変親切に接して下さる。

- 11:30 作業終了。午前中だけで9割方作業が完了している。本学メンバーは午後の作業には参加できないので、茨城からのお二人にあとをお願いする。

依頼主の方が、我々メンバーのためにお弁当を用意して下さる。全員で心から感謝し、送迎車でセンターへ戻る。

- 11:50 昨日と同様、資材の洗浄、返却、作業終了報告。

- 12:00 シャワー後、いただいたお弁当で昼食、その後ミーティング。帰路の確認後、宿泊所の清掃、荷物の整理、発送。終了後は出発(16:00)まで休憩時間とする。学生は仮眠するかと思っていたが、皆思いのほか元気で、各自近隣へ外出。筆者も数名の学生と近隣の様子を見て歩く。

- 16:00 全員がセンターへ戻る。社会福祉学科の学生2名は、災害ボランティアセンター常駐の町社協職員の方にお話をうかがっていたとのこと。また、国際観光学科の学生1名は、近隣の仮設住宅へ行き、住民の方とお話をしてきたとのこと。学生の予想外の行動力と意欲に感服。

- 16:15 センター本部にあいさつ後、タクシーに分乗して山田中央町へ。

筆者は、タクシーを下車する際、運転手さんから、運転手さんご本人が撮影した震災当時の現地の写真のプリントをいただく。山田の状況を知ってほしいという地元の方のお気持ちに心打たれる。丁重にお礼を申し上げたうえで頂戴する。

- 16:55 山田中央町から宮古駅前行きバス乗車。

- 17:50 宮古駅到着。

- 18:00 盛岡駅前行きバス乗車。

- 20:10 盛岡着。買い物と夕食。

- 23:45 東京行きバス乗車。

## □4日目 (10月17日・日) 晴れ

- 7:00 予定より1時間早く羽田空港着。

- 11:15 予定より10分遅れで羽田空港発。

- 14:25 予定より15分遅れで長崎空港着。最後のミーティングとあいさつをして解散。

- 15:30 佐世保行きバス乗車。

- 17:00 大学着。

## 2 現地の状況

先にも若干言及したが、ここでは、筆者らのチームが現地を訪問した当時の山田町の状況を記録にとどめておくこととしたい。

8月にも先遣隊メンバーとして現地を訪問したキャリアセンター職員によると、現地の復興はあまり進んでいないとのことであった。筆者が見た限りでも、町の中心部もいまだ建物の土台だけが残っているというところが多く、復興は思ったように進んでいないという印象であった。ただ、前述のとおりスーパーやコンビニエ



ンスストアの営業は旧に復しており、水道等も使用可能で、インフラ関係は復旧しつつある状況であった。また、いわゆる仮設住宅のほか、通常の公営住宅のような3階建て程度の災害復興住宅も建設が進みつつあった。

がれきが残ったままの敷地も多く見受けられた。全体としての大きながれき撤去（重機等を用いた作業）はほぼ完了したが、現在は個別のお宅（更地）の細かながれき撤去のニーズが多いとのこと。出発前は、そのような作業はほぼ終了しているとの情報があり、その意味でこのような状況はやや意外であり、九州で入手できる情報と現地の状況との齟齬を実感させられた。今後も、このような状況がしばらく続くものと見受けられた。

当時の現地でのニーズは、上記のとおりがれき撤去等の屋外作業が主であった。出発前想定していた仮設住宅への訪問やサロン活動は、当時は現地としても未だ緒についた段階であり、他所からのボランティアには依頼していないとのことであった。この点については、今後の活動内容との関連もあるので、現地の状況の推移を見守っていく必要がある。

ボランティアセンター近くのがれき集積場では、本学到着の4日ほど前から火災が発生していた。町の消防団がほぼ総出で消火作業にあたっているが、山積みになっているがれきの内部から出火しているため、思うように消火が進まず、鎮火の見通しはたっていないという状況であった。現場周辺には煙と異臭が充満していた。センターから現場へ向かう道路にも流れてきた煙が立ち込め、数メートル先もみえない状態であった。本学チームの出発時点でもまったく鎮火しておらず、その後の状況や現場で作業しておられる方々の健康を懸念しながらの出発となった。

現地災害ボランティアセンターでは、震災から数か月を経ていることもあり、ボランティアの受け入れ態勢はすでにほぼ完全に整っていた。マッチングや作業内容、必要資材、作業現場への移動等、センターの指示に従っていれば全く

問題ない。そのぶん、事前に参加側から参加人員、可能な作業内容等の必要事項をきちんと伝達しておくことが重要である。

最後に宿泊についてであるが、上記活動報告でも言及のとおり、ボランティアの宿泊は、ボランティアセンターに隣接（建物は渡り廊下でつながっている）する宿泊所を利用した<sup>2)</sup>。この宿泊所は武道館を転用したもので、非常に広く屋根も高いため、その後の冬場にかけては室内気温も低下することが予想された<sup>3)</sup>（今般宿泊時は比較的気温が高く、寝袋のみで十分であった）。

### 3 成果と今後の課題等

#### ① 成果

□学生の積極的参加が得られた点

個人的には、学生の参加は今回は多くて5名程度と想定していたが、最終的には8名と予想以上の多くの参加が得られた。筆者の周囲では、他にもすでに次回以降の参加希望の意思を表明している学生がおり、このような意思・意欲をもっている学生は少なくないと思われる。このような学生が多くいることを確認できたこと自体も、活動の成果の一つとして受け止めた。

□学生および教職員にとっての「学び」となった点

自発的な意思により活動に参加し、自分の目で現地の状況を見、自分の耳で現地の方々のお話を聞き、自分の体で作業をし、現地でいま何が必要とされているかを自ら認識し、自分自身や本学で何ができるかを考えるという一連の過程すべてが、参加者全員にとっての大きな「学び」であった。この学びの成果を学内でいかに生かしていくかが今後の重要な課題の一つである。

#### □現地との継続的な信頼関係の構築

今回も、先遣隊に引き続き、センタースタッフや社協職員の方々への関係構築に努めた。ただし、日程が週末であったため、町役場や社協を直接訪問することはできなかった。また、山田町に対しては、三重県の「みえ災害ボランティア支援センター」が組織的・継続的な関係を構築し、毎週多くのメンバーを派遣している。今回本学出発時にも、入れ替わりに20名程度の三重県からのメンバーが到着していた。今後、本学が山田町で継続的に活動を行っていくにあたっては、このような他のボランティア団体やメンバーとの関係構築も重要であると思われる。当日は、出発前にみえ災害ボランティア支援センターの中心メンバーの方と名刺交換をし、今後のご協力をお願いした。

#### □学生引率ノウハウの構築

今回の参加学生は、いずれも主体的に行動できるメンバーであり、突然のスケジュール変更等についても機敏に対応してくれ、引率という点に関し特に問題となる点はなかった。そのような点が確認できたことも今般の成果の一つである。ただし、今後参加人数が増加した際の引率業務のあり方については、マニュアル化も含めた検討が必要と思われる。

### ② 今後の課題

#### □現地への移動手段の再検討

今回は、学生の経済的負担を考慮し、最安の交通機関を選択しての移動となった。その結果、移動に20～24時間と多大の時間を要し、現地での活動時間が限られると同時に、学生の疲労も大きなものがあった。現地到着時にメンバーがすでに疲労困憊している状態では、肝心の現地での活動にも支障をきたすことになる。その意味で、現地への往復には、できるだけ合理的な移動手段が選択されるべきであると考えている。ただし、この点は下記の費用負担の問題と直接かわるので、次回以降については、参加学生相

互で事前に協議してもらい、移動手段を選択・決定してもらうというのも一案である。

これに関連し、現地での移動手段の問題もある。上述の通り、現地災害ボランティアセンターは、スーパー等のある町の中心部からは若干離れており（車で10分程度）、徒歩での買い出し等は困難である。今回は、学生の安全面を考慮してレンタカーは使用せず、必要に応じてタクシーを利用したが、思いのほか費用がかかること（1回の買い出しで約4,000円のタクシー代を要した）、現地ですぐに手配できるタクシーの台数にも限度があることなどから、安全面に十分に配慮したうえでのレンタカーの利用が合理的ではないかと思われる（レンタカーは、盛岡、宮古などで手配できる）。

#### □学生の費用負担のあり方の検討

今回は、参加に要する費用（主に移動費。約4万円）の半分を大学側に負担してもらい、残りの学生自己負担分（2万円）についても、教職員の寄付を募ることで負担の軽減をはかったが、今後活動を継続的に実施していくにあたっては、毎回上記のような方法で対応することには限界があると思われる。学生ができるだけ活動に参加しやすい費用負担のあり方や、そのための仕組みとルールの構築について今後検討が必要である。

ただし、参加にあたって多少の経済的負担をすることもボランティアズムの一環であると考えられ、その意味で学生にも応分の負担を求めることには問題はないと思われる（むしろ、「大学が全額出してくれるなら行ってみたい」というような安易な動機での参加を避けるためにも、一定の負担を求めることは必要であると思われる）。

#### □派遣期間の検討

今回は、派遣期間を週末に限定し、移動にも時間を要したため、現地ですべて活動できたのは15日午後および16日午前の、実質1日間であっ

た。学生派遣としては初回の今回は、これだけでも十分な成果があったと考えているが、現地のニーズや学生の単位取得等の諸事情を勘案すると、今後は移動日も含めて4～6日程度の派遣期間が検討されてもよいのではないかと思われる。ただし、ボランティア活動が学業に支障をきたしては本末転倒であるので、状況に応じた慎重な検討が必要である。

#### □学生の身分証明

現地での活動にあたっては、災害ボランティアセンターへの登録が必要となる。初回時に所定の書類に必要事項を記入したうえで、住所を確認できる公的書類を提示することになるが、学生証・保険証には現住所が記載されていないため、運転免許証を所持していない学生について問題が生じることがある。今回は学生証の提示で対応していただいたが、現地としては問題が残るようであるので、今後検討が必要である。

#### ③ 帰着後の活動

今般の経験を、その場限りのものとしないうちに、帰着後も現地での活動内容などを各方面に伝えるためのさまざまな取り組みを、学生を主体として実施した（本稿もその一環である）。まず、帰着後に参加メンバーで再度集合し、課題や反省点の洗い出しを行った。前述の課題等には、この過程で学生たちによって抽出されたものが多く含まれている。

さらに、このような検討を踏まえ、2011年12月には、学内で活動報告会を実施した。これについても、筆者ら教職員は司会等の裏方に終始し、学生たちが準備した内容・資料にもとづいてプレゼンテーションを行った。これら一連の作業を通じて、学生たちが自身の活動を振り返り、その意義を再確認することは、大学教育の一環としてのボランティア活動には不可欠の要素である。事実、この過程を通じて、学生の成長を大いに感じ取ることができた。このようないわゆる PDCA サイクルの確立は、今後の活

動における必須の要素である。

#### おわりに

以上簡単にはあるが、本学が初めて実施した被災地学生ボランティア活動について報告と若干の考察を行った。筆者はボランティア活動等の専門家ではないため、考察には不十分な点が多く残されていることを危惧するが、そのようないわば「素人」の活動記録や考察が、本学の今後の活動に何らかの寄与しうることを願うものである。

周知のとおり、山田町をはじめとする各被災地も、復興に向けて着実にその歩みを進めている。それに伴い、被災地でのボランティア活動に求められる活動内容も次第に変化しつつあることが、本年8月から9月に現地に入った本学メンバーの活動状況からもうかがわれる。今後も、現地の状況の的確な把握に努め、現地との信頼関係を構築しながら、本学として継続的に行っていけることを模索していく必要があろう。そのような取り組みを教職員と学生が一体となって行っていくことは、「人間尊重」を標榜する本学の教育理念の具現化への強力な推進力のひとつとなるであろうことを確信するものである。

最後に、今般このような貴重な経験の機会を与えていただいた本学の配慮に深謝するとともに、山田町をはじめとする被災地の1日も早い真の復興を心より願ってやまない。

#### 注

- 1) 参加学生の学年、教職員の所属は、いずれも派遣当時の2011年現在のものである。
- 2) 本年8月に現地に入ったメンバーによると、この宿泊施設は現在は使用されておらず、その近くの別のボランティア用宿泊施設を利用したとのことであった。
- 3) 山田町災害ボランティアセンターにおけるボランティアの受入れは、同年10月末をもっていったん中止され、冬期間は同センターも閉鎖されていた。2012年4月から受入れが再開されている。